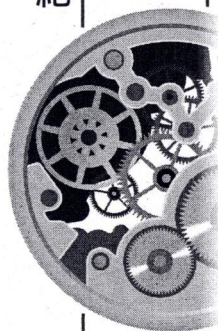


# 越境精神

小長谷 有紀



## 梅棹忠夫の残したもの

8

### 知的生産の入り口

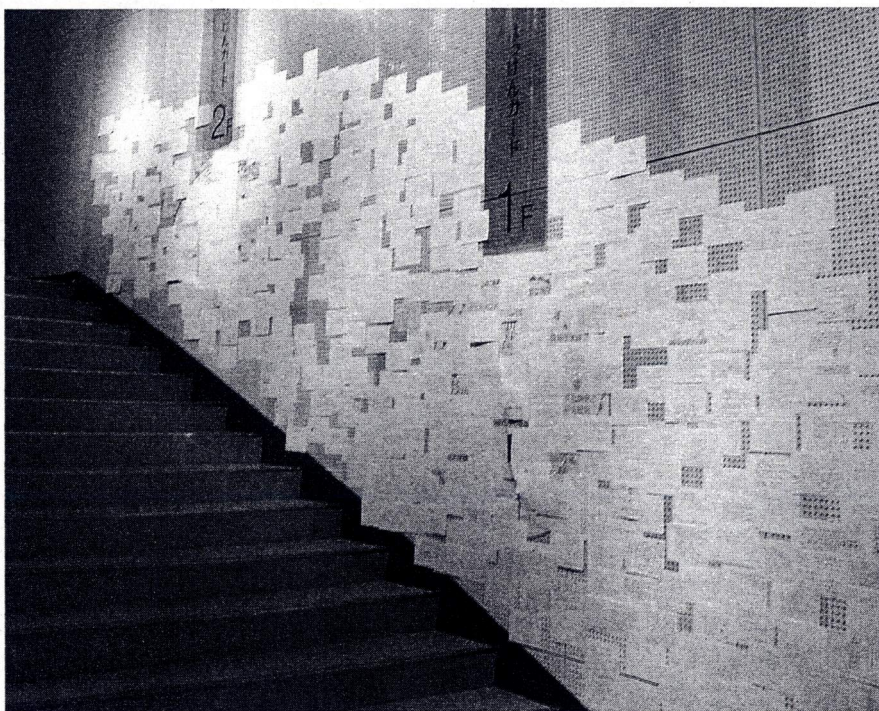
3・11のあの瞬間、わたしはめまいかと錯覚した。そろそろ休まないで大変だと思いつつ、自分よりもプラインドのほつが大きく揺れているのを見て、地震だと理解した。

国立民族学博物館での「ウメサオタタオ展」は、その前日に一般公開を始めたばかりだった。開催期間3カ月中の来館者数を5万人程度と見込んでいたけれど、終わりのない災害が始まったのだから、もはや客足は期待できないと悟った。

予定通り6月14日に閉幕し、来館者総数は4万3千人、1日平均5百人。本館特別展としては平均値である。けれども、いつもととにかく違うような気がするのには、遠くから来た人たち、何度も来る人たち、ゆっくり見る人たちがいたからだ。平日、展示場で解説をしていると「あんた前より説明がうまくなったな」などと声をかけていたのだ。

来館者がそれぞれに梅棹忠夫と出会い、何かしらエネルギーを得てゆく。もしも脳のリフレッシュ

## 年齢の壁超え感性刺激



それぞれのウメサオとの「遭遇」が書き込まれた「発見カード」は、こうして展示場に張られていた—大阪府吹田市の国立民族学博物館

度をはかる道具があったなら、来館者数以外の数字で、展示場のねうちを示せたかもしれない。  
展示場で人びとはどのように梅棹との遭遇を楽しんだのだろうか。

展示場に設けられた「発見カード」のコーナーは、B6判の紙かiPhoneを使って感想を記入する場所だった。約1800件のカードが残り、新しく梅棹アーカイブズ入りする。お気に入りをお

答するほか、自由記述が600件と意外に多い。さらに、こちらの固定観念を超えて予想外だったのが、子どもたちに出会えたということ。彼らの肉声をどうぞ。

「ウメサオタタオさんがこんなにすごいとは、思ってもみませんでした。いろんな世界をまわっていろいろ調べることは、すばらしいものです。ぼくも、そういう人になりたいなあと思っています。あと本などもいっぱい書いたものいいと思います。本は、いいものですからね」(9歳)、「今日、うめさおただおさんを見てよかったです。一番すごいと思ったのは未来のことです」(8歳)、「二十一世紀の人類の生きかたに思いをはせる」(8歳)、「鳥のなき声をオンパにするなんてすごいですね。絵もみました。うまかったですね。またきます」(8歳)。「なんで90さいまでいきれたんですか!」「よくそんなに頑張って書けるなあと思った。あきらめの悪い人だったのかもしれない」

絵や文章で記録することは、誰にもできる知的生産の入り口だから、子どもたちの感性も大いに刺激したのだろう。これほどまでに年齢の壁を超えられるとは、梅棹自身思ってもみなかったのではないだろうか。

(国立民族学博物館教授)